



第11回原子力政策・福島復興シンポジウム
第2部「福島復興と大学の役割」

福島復興における大学の役割を考える —これまでのシンポジウムとこれからをめぐって—

2022年3月2日（水）オンライン開催

- 山田美香（早稲田大学環境総合研究センター・次席研究員）
- 朱鈺（早稲田大学アジア太平洋研究科・博士課程）
- 松川希映（早稲田大学アジア太平洋研究科・修士課程）
- 倉重水優（早稲田大学政治経済学部2年）



■ 本日の内容

0. 自己紹介
1. はじめに
2. これまでの福島復興をめぐる早稲田大学の取り組み
3. シンポジウムの振り返り：何を議論してきたか
第1回(2012年)～第10回(2021年)
4. これからに向けて：地域（フィールド）に入る



自己紹介

○山田美香（岡山県出身）

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
修了(学術博士、国際関係学専攻)

長年、民間企業(製造業)に従事し、在仏
勤務歴18年。 **現在**、早稲田大学環境総
合研究センター・次席研究員として**福島県
立ふたば未来学園(中高一貫校)**に常駐。
福島県**双葉郡**在住(2021年7月～)

朱鈺（しゅぎよく：中国・南京出身）

早稲田大学人間科学部卒業、早稲田大学人間科学研究科修了(研究テーマ：気
候変動と国際協力)、2018年より早稲田大学アジア太平洋研究科博士課程在籍
(松岡研究室)。回り道を経て、廃炉に関する地域対話をテーマに研究中。

私と福島復興：松岡研究室に入り、福島に関わり始めた。以前は全く知らなかったが、
今は友人や中国にいる家族に福島の現状を説明できるようになった。複合災害からの
福島復興は世界でも未曾有のことで、その経験が非常に貴重である。将来中国に帰っ
たら、福島の経験を広く共有していきたい。

松川希映（まつかわ きえ：奈良県出身）

2021年3月法政大学人間環境学部卒業、2021年4月より早稲田大学大学院アジ
ア太平洋研究科修士課程在籍(松岡研究室)

私と福島復興：震災時は小学校の卒業式の練習をしており、揺れも感じなかった。映
像や写真での東日本大震災しか知らず、少し遠い存在に感じていた。松岡研究室に所
属したことを機に、研究会やシンポジウムへの出席やワークショップに参加し、福島復興に
興味・関心を持った。今後、一個人として、そして学生として、それぞれどのように福島に
関わっていくか、考えていきたい。

倉重水優（くらしげ みゆ：東京都出身）

2020年早稲田大学政治経済学部入学

多様な見方を受け入れる力や内面を表現する力を持つアートを用い、経験に基づいた政
治参加や、人類の知恵・教訓の継承、地域復興の拠点となる場の設計を目標に大学
で政治学、哲学を学んでいる。

私と福島復興：東京で9歳の時に震災を経験し、記憶はほとんどなかったが、松岡先生
の授業で原発事故が東京で使う電気を発電するために起こったことを知り、自分事として
捉えられるようになった。



はじめに

まもなく福島第一原子力発電所事故から11年、本シンポジウムも今回で11回を数える。

昨年は東日本大震災・福島原発事故から10年という節目であり、第10回のシンポジウムの閉会の際、研究代表・松岡俊二は次のように述べ、シンポジウムに一区切りつけることを予感させた：

「...毎年、「3.11」周辺で原子力政策と福島復興に関するシンポジウムを続けてきた。10年、10回が一区切りと考えてきたので、来年以降どうするのかは、関係の研究者や福島の皆さんと相談して決めたいと考えている」

しかし、次のことばが続いた：

「... 報告者・司会・パネリストの皆さんに大変熱心にご議論いただき、多様な専門家と地域社会の方々による1F廃炉の将来像と「デブリ取り出し」を考える大変良いスタートに立つことが出来たと考えている。ただ、**10年経って、ようやくスタートラインに立つことが出来た**のであり、これからが重要である」

そこで本報告は、第2部で“福島復興と大学”の**これまでとこれから**についてオープンな議論をするため、スタートラインに立つまでの10回のシンポジウムを振り返り、スタートラインに立った昨年からの新たな取り組みの報告をする。



福島復興と 早稲田大学

シンポジウムの 振り返り 開催履歴

2012年～2021年

	開催日時	シンポジウム名	主催・共催	後援	研究費原資
第1回	2012年3月8日(木) 13:00-17:00 於 早稲田大学 国際会議場	東日本大震災と福島原発災害から1年 ー複合巨大クライシスの原因・影響・対策・復興ー	主催 早稲田大学重点領域研究機構 早稲田大学東日本大震災復興研究拠点 共催 (独)科学技術振興機構国際科学技術部 東京工業大学大学院社会理工学研究科 パリ政治学院IDDRI研究所 早稲田大学重点領域研究機構 早稲田大学グローバル・サステナビリティ研究所	早稲田大学日欧研究機構 早稲田大学日米研究機構 早稲田大学アジア研究機構	早稲田大学東日本大震災復興研究拠点 インフラ・防災系復興研究PJ 科学技術進行機構 国際緊急共同研究・調査支援プログラム
第2回	2013年3月8日(金) 13:00-17:00 於 早稲田大学 第19号館 710号室	東日本大震災と福島原発災害から2年 ーアジアと手を携えた未来への希望を創る震災復興のあり方ー	主催 早稲田大学重点領域研究機構 早稲田大学東日本大震災復興研究拠点 共催 東京工業大学大学院社会理工学研究科 パリ政治学院IDDRI研究 高麗大学日本研究センター 早稲田大学アジア太平洋研究センター 早稲田大学キャンパス・アジアEAUIプログラム	-	文部科学省原子力基礎基盤戦略研究 イニシアティブ「原子力産業への社会的 規制とリスク・ガバナンスに関する研究」
第3回	2014年3月7日(金) 13:00-17:30 於 早稲田大学 第19号館 710号室	東日本大震災と福島原発災害から3年 ー原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考えるー	主催 早稲田大学重点領域研究機構 早稲田大学東日本大震災復興研究拠点 共催 早稲田大学アジア太平洋研究センター 東京工業大学大学院社会理工学研究科	-	文部科学省原子力基礎基盤戦略研究 イニシアティブ「原子力産業への社会的 規制とリスク・ガバナンスに関する研究」
第4回	2015年3月11日(水) 13:00-17:30 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第4回 原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から4年 ー原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考えるー	主催 早稲田大学重点領域研究機構 早稲田大学東日本大震災復興研究拠点 共催 早稲田大学アジア太平洋研究センター 東京工業大学大学院社会理工学研究科	-	文部科学省原子力基礎基盤戦略研究 イニシアティブ「原子力産業への社会的 規制とリスク・ガバナンスに関する研究」
第5回	2016年3月7日(月) 13:00-17:30 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第5回 原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から5年 ー原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考えるー	主催 早稲田大学レジリエンス研究所	早稲田大学アジア太平洋研究センター 早稲田大学総合研究機構	早稲田大学総合研究機構から助成
第6回	2017年3月7日(火) 13:00-17:30 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第6回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から6年 ー原子力政策と福島復興の今後のあり方を考えるー	主催 早稲田大学レジリエンス研究所	早稲田大学アジア太平洋研究センター 早稲田大学総合研究機構	早稲田大学総合研究機構から助成
第7回	2018年3月7日(水) 13:00-17:00 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第7回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から7年 ー原子力バックエンド問題と福島復興の今後のあり方考えるー	主催 早稲田大学レジリエンス研究所	早稲田大学アジア太平洋研究センター 早稲田大学総合研究機構	早稲田大学総合研究機構から助成
第8回	2019年3月7日(木) 13:00-17:00 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第8回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から8年 ー未来世代から原子力問題と福島復興を考えるー	主催 早稲田大学レジリエンス研究所	早稲田大学アジア太平洋研究センター 早稲田大学総合研究機構	早稲田大学総合研究機構から助成
第9回	2020年3月7日(土) 13:00-17:00 於 早稲田大学 第19号館 710号室 (一般参加中止)	第9回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から9年 ーバックエンド問題と福島復興を考えるー	主催 早稲田大学レジリエンス研究所	早稲田大学総合研究機構 早稲田大学アジア太平洋研究センター 早稲田大学環境総合研究センター 早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター	早稲田大学総合研究機構から助成
第10回	2021年3月6日(土) 13:00-17:00 オンライン開催	第10回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から10年 ー1F廃炉の将来像と『デブリ取り出し』を考えるー	主催 早稲田大学レジリエンス研究所	早稲田大学アジア太平洋研究センター 早稲田大学環境総合研究センター 早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター	-



福島復興と早稲田大学：2011年からの研究活動

2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021 2022

**早稲田大学東日本大震災復興研究拠点・
複合災害研究所** (所長:柴山知也・理工学術院教授)
2011年5月設立-2016年3月31日終了

第1回(2012)

第2回(2013)

第3回(2014)

第4回(2015)

早稲田大学レジリエンス研究所:2014年5月設立-現在 (所長:松岡俊二・国際学術院教授)

第5回(2016)

第6回(2017)

第7回(2018)

第8回(2019)

第9回(2020)

第10回(2021)

第11回(2022)

日本生命財団・学際的総合研究助成
環境研究助成「環境イノベーションの社会的受容性と持続可能な都市の形成」(2015年10月-2017年9月)

科研挑戦的萌芽研究「原子力災害被災地におけるコミュニティ・レジリエンスの創造」(2015年4月-2018年3月)

科研基盤研究(B)「高レベル放射性廃棄物(HLW)処理・処分施設の社会的受容性に関する研究」(2016年4月-2019年3月)

科研基盤研究(B)「可逆性アプローチによる高レベル放射性廃棄物(HLW)管理政策と世代間公平性」(2019年4月-2022年3月)

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター
2017年5月設立-現在 (センター長:松岡俊二・国際学術院教授)

凡例 第n回 = 本シンポジウム

□ = 学術研究活動

第n回ふ = ふくしま学(楽)会

■ = 市民との研究活動

第1回ふ (2018.01)

第2回ふ (2018.08)

第3回ふ (2019.01)

第4回ふ (2019.08)

第5回ふ (2020.01)

第6回ふ (2020.08)

第7回 (2021.0)

第8回 (2021.0)

第9回ふ (2022.01)

4つのテーマ：まちづくりと住民参加, 農林水産業の再生と風評被害問題, 再生可能エネルギーとスマートタウン, 1F事故処理・廃炉と汚染水問題

社会イノベーション・イニシアティブ (SI構想) 3つの柱
「1Fの事故遺産と記憶遺産の利活用：1F Heritage構想」
「国際芸術・学術拠点構想」
「創造的復興研究会」

1F廃炉の先研究会(2019.07-現在)

国際芸術・学術研究会 (2020.04-現在)

創造的復興研究会 (2021.07-現在)

シンポジウムの 振り返り：テーマ

➤ 福島復興関連の 動向とシンポジウ ムのテーマが連動

	開催日時	シンポジウム名	福島復興関連の主な動き
第1回	2012年3月8日(木) 13:00-17:00 於 早稲田大学 国際会議場	東日本大震災と福島原発災害から1年 ー複合巨大クライシスの原因・影響・対策・復興ー	2012年2月10日 「復興庁」発足 2012年6月20日 「原子力規制委員会設置法」可決 2012年9月19日 「原子力規制委員会」発足（それまで原子力「利用」の推進を担ってきた経済産業省から安全規制部門を分離し、環境省の外局組織として新設）
第2回	2013年3月8日(金) 13:00-17:00 於 早稲田大学 第19号館 710号室	東日本大震災と福島原発災害から2年 ーアジアと手を携えた未来への希望を創る震災復興のあり方ー	2013年5月28日 1Fから20キ口圏に設定された警戒区域は全て解除(但し、放射線量が高い地域は帰還困難区域として原則立入り禁止が継続) 2013年11月17日 震災と原発事故による避難等が要因で亡くなった福島県内の震災関連死と認定した死者数(1605人)が、地震や津波による直接死(1603人)を上回る 2014年2月10日 IAEAは第一原発の廃炉作業に関し、放射性物質が基準値を下回った汚染水の海洋放出を検討するよう最終報告書にまとめる
第3回	2014年3月7日(金) 13:00-17:30 於 早稲田大学 第19号館 710号室	東日本大震災と福島原発災害から3年 ー原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考えるー	2014年6月 「イノベーション・コースト構想」とりまとめ 2014年9月1日 福島県知事が中間貯蔵施設の建設受け入れ容認 2015年1月21日 原子力規制委員会は、汚染水対策として原子炉建屋周辺のサブドレンから地下水をくみ上げ浄化後に海に放出する計画を認可
第4回	2015年3月11日(水) 13:00-17:30 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第4回 原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から4年 ー原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考えるー	2015年3月13日 除染に伴う廃棄物の中間貯蔵施設への搬入開始 2015年4月8日 福島県立ふたば未来学園高等学校開校 2015年9月5日 楡葉町：避難指示区域全面解除 2016年3月11日 「復興基本方針」：復興後期5か年(2016-2020年)を「復興・創生期間」と位置付け10年間の「総仕上げ」に向け、被災地の自立につながる地方創生のモデルの実現めざし見直す
第5回	2016年3月7日(月) 13:00-17:30 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第5回 原子力安全規制・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から5年 ー原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考えるー	2016年4月10-11日 第1回福島第一廃炉国際フォーラム(いわき市) 毎年開催中 2016年6月3日 「トリチウム水タスクフォース報告書」公表 2016年6月12日 葛尾村：避難指示区域全面解除 2016年6月14日 川内村：避難指示区域全面解除
第6回	2017年3月7日(火) 13:00-17:30 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第6回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から6年 ー原子力政策と福島復興の今後のあり方を考えるー	2016年7月12日 南相馬市：居住制限区域、避難指示解除準備区域解除 2016年12月20日 「原子力災害からの福島復興の加速のための基本方針」(閣議決定) 2016年12月21日 高速増殖原型炉「もんじゅ」廃炉を正式決定(福井県) 2017年3月31日 飯館村、川俣町、浪江町の居住制限区域、避難指示解除準備区域を解除 2017年4月1日 富岡町の居住制限区域、避難指示解除準備区域を解除
第7回	2018年3月7日(水) 13:00-17:00 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第7回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から7年 ー原子力バックエンド問題と福島復興の今後のあり方考えるー	2017年7月20日 原子力規制委員会「原子力利用に関する基本的考え方」を決定：事故後の状況変化や昨今の国内外の状況をふまえるとともに、原子力政策全体を見渡し、日本での原子力の平和利用、国民理解の深化、人材育成、研究開発等の目指す方向性や在り方を分野横断的な観点から提示 2017年7月28日 第一回福島イノベーション・コースト構想関係会議
第8回	2019年3月7日(木) 13:00-17:00 於 早稲田大学 第19号館 710号室	第8回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から8年 ー未来世代から原子力問題と福島復興を考えるー	2018年3月31日 帰宅困難区域を除く8県100市町村(除染特別地域及び汚染状況重点調査地域)の全域で面的除染が完了 2018年7月1日 主要原子力施設設置者らが「原子力エネルギー協議会(ATENA)」を設立(目的:原子力産業界の自律的かつ継続的な取り組みを定着させていくこと)
第9回	2020年3月7日(土) 13:00-17:00 於 早稲田大学 第19号館 710号室 (一般参加中止)	第9回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から9年 ーバックエンド問題と福島復興を考えるー	2018年11月30日 「東京電力廃炉資料館」開館 2019年4月8日 福島県立ふたば未来学園中学校開校 2019年4月10日 大熊町：居住制限区域、避難指示解除準備区域を解除 2019年7月31日 福島第二原発全4基の廃炉を正式に決定 2020年3月 JR常磐線全線開通：富岡(富岡町)～浪江(浪江町)間運転再開(3/14)、双葉町：特定復興再生拠点区域の一部解除、避難指示解除区域を解除(3/4)、大熊町：特定復興再生拠点区域の一部解除(3/5)、富岡町：特定復興再生拠点区域の一部解除(3/10)
第10回	2021年3月6日(土) 13:00-17:00 オンライン開催	第10回 原子力政策・福島復興シンポジウム 東日本大震災と福島原発災害から10年 ー1F廃炉の将来像と『デブリ取り出し』を考えるー	2020年9月20日 「東日本大震災・原子力災害伝承館」開館 2020年11月18日 HLW最終処分地選定に向けた「文献調査」開始 2020年12月9日 原子力規制委員会は六ヶ所村の核燃料工場について合格示す審査書 2020年12月24日 「燃料デブリ」取り出し開始延期を発表



シンポジウムの問題意識：社会的文脈へ

【第2回シンポジウムより】

「福島原発事故の教訓の一つに、研究者・専門家だけが狭い閉鎖的な「村」をつくり、**市民との対話を欠くと人間や社会にとって大切な問題を見失い、大きな社会的失敗をまねいた**」

「大学の研究者・専門家のみならず、参加者の**多様な意見も取り入れ、問題解決の糸口**を見出す必要性」

「得られた成果を広く**社会にアウトリーチ**するためにシンポジウムを開催し、**社会へ還元**するためその内容を記録として残す」

「**研究者一丸**となって継続して研究を行っていきたい」

- 「研究者一丸」➡**分野横断**した研究者・専門家らが
- 「多様な意見も取り入れ」「広く社会にアウトリーチ」➡**市民に歩み寄り、耳を傾ける**
- 「社会に還元」➡**社会的文脈に捉えなおす**



社会的文脈の中で考える：原発事故前からの議論

1970年代から原子力をめぐって公衆の参加の必要性が議論：

➡ 低線量被爆の健康影響を例に、「科学に問うことはできるが、科学によって答えることができない」というトランス・サイエンス的問題群（trans-scientific questions）の概念を示し、**科学者も加わった社会全体での討議の必要性**を主張
(Weinberg 1972)

➡ 原子力のリスク評価が本質的に政治と不可分であり、科学の純潔性（scientific purity）が政治によって揺るがされる懸念から、複雑な技術問題にも**公衆が参加できるアクセス**が必要。**社会的にリスク評価をする必要性**が主張
(Nowotny 1977)

➡ ポスト・ノーマルサイエンスは、高い不確実性と意思決定の利害関係を特徴とする社会問題に対処するには、“**拡張されたピアコミュニティ（extended peer community）**”という**科学を社会的文脈の中で捉えなおす考え**を表出。
(Funtowicz and Ravetz, 1993)

➡ 英国では『科学と社会（Science and Society）』（2000年2月）（英国議会上院科学技術委員会報告）で、科学技術をめぐる政策のプロセスにおいて、**市民が関与するような仕組みを組み込む必要性**が強調

(Irwin 2006, 中村 2008b)



福島原発事故と社会：誰の問題か

福島第一原子力発電所の事故は、自然の脅威と科学技術の限界を露呈し、現代社会を生きる**私たちに**多くを問いかけた

その一つ ➡ **科学と社会のあり方**

(山田 2021)

市民は、科学技術をめぐる議論の場から排除されてきたといわれるが、

(中村 2008a)

科学技術は社会を構成する私たち一人一人の生活に利便性をもたらすが影響もする。科学技術に関わる社会的な問題は、直接あるいは間接的に私たちの暮らしに影響を与え、民主主義社会において、**市民一人一人の問題と捉えることができる**と考えられる。

(藤垣 2004)



これまでのシンポジウムの議論：地域の大学への期待

- 「（人口1割が双葉8町村からの避難者となり）東電の関係者、農業者、漁業者、そして、復興事業でお金を手にした人たちもいます。コミュニティーの中に**ねじれを生んでしまった**、それが今、原発の事故以降、福島全体を覆っています。これを**内部の人間の力で変えていく**というのは、**非常に難しい**。大学の先生方が、**このような場で議論や研究をして、その立場を生かした形で政治の様々な場面に上げて**いっていただければ、**きっと何かが変わる**のではないかと。私たちでは**なかなか上げられない声**も、先生方を介すことによって形となって**発言できる**のではないかと、私たちは**期待している**ところがあります」（吉田恵美子 第2回）
- 「ぜひとも現地、**現場の方に足を運んでいただきたい**、一度ではなくて、**繰り返し**。福島の人、東北の人は、なかなか本音を言わない、我慢するというようなところがあったりするので、ぜひとも**交流し、決して机上の議論で終わらすことなく、その声、情報発信**を皆さんのお力でしていただきたいと思う。それと、私どもの今の活動の目的は、この地域に新たな希望を作ろうと思ってやっております。そのような活動をぜひとも**専門的な知識や人脈の中で後押し**をしていただければと思っております」（島村 第2回）。
- 「...いろいろなことがはっきり聞こえてきます。そのようなものは、やはり新聞とは大分違っているところもありますが事実といえます。そのようなところを我々は、ある程度正しく、中立の目で見ていますので、ぜひ、そのようなものを**研究者の方、先生たちが国のほうに具申して**いただくことで少しでもそれが**改善**されれば、自分たちもふるさとを捨てることなく何とか**帰られるかな**ということ**で期待**を持っています」（松本 第2回）。



これまでのシンポジウムの議論：大学をめぐる

第9回（2020年）全体討論における活発な議論：

- 「**専門家の優位はあくまで相対的**なものであり、成熟した市民社会が**専門家を値踏みしながら信用**していくというのが、理想的な姿... ..もうしばらく(討議を)積み重ねることによって、**市民と専門家の適切な緊張関係**が形成」(寺本 第9回)
- 「より社会一般には、産学連携や経済発展に資するような研究を奨励する風潮が今や当たり前となっている。専門家が世俗から離れて真理の探究に没頭するのではなく、**とにかく業績を出すことが重視**され、**真理で動くことを弱めてきてしまったのが、この20年**ではないかと感じている。本来、例えば大学のテニユア制度などは、極端に振れないようにする制度のはずだった」(寿楽 第9回)
- 「**科学者・研究者がかつては真理を探求**するということをしてきたが、**近年では経済の論理**というか、**功利的な**考え方でやっているのではないかと思う」(大手 第9回)
- 「科学者あるいは大学は、現在、アカデミック・キャピタリズムといわれ大きく変質してきている。**科学者自身が真理を絶対的な価値としてやってきているのか**、利益相反(COI)問題がその典型であり、**市民社会から科学者のあり方が疑問視**されていると感じる。大学自身もそうした動向を率先している状況があるのも事実であり、政府や社会の問題だけではなく、**科学者・大学・研究者にも大きな責任**がある」(松岡 第9回)



シンポジウムの振り返り：議論の成果とは

		第1回 2012年3月8日(木)	第2回 2013年3月8日(金)	第3回 2014年3月7日(金)	第4回 2015年3月11日(水)	第5回 2016年3月7日(月)	第6回 2017年3月7日(火)	第7回 2018年3月7日(水)	第8回 2019年3月7日(木)	第9回 2020年3月7日(土)	第10回 2021年3月6日(土)
テーマ		複合巨大クライシスの原因・影響・対策・復興	アジアと手を携えた未来への希望を創る震災復興のあり方	原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考える	原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考える	原子力安全規制の今後のあり方と福島復興を考える	原子力政策と福島復興の今後のあり方を考える	原子力バックエンド問題と福島復興の今後のあり方を考える	未来世代から原子力問題と福島復興を考える	バックエンド問題と福島復興を考える	1F廃炉の将来像と『デブリ取り出し』を考える
構成	プログラム	技術的 社会的 地域の声	技術的 社会的 地域の声	技術的 社会的 地域の声	技術的 社会的 地域の声	技術的 社会的 地域の声	技術的 社会的 地域の声	技術的 社会的 地域の声	技術的 社会的 地域の声	技術的 社会的 地域の声	技術的 社会的 地域の声
	エンター世代	3 3 0 M F 学生	2 5 3 M F 学生	3 3 3 M F 学生	2 4 2 M F 学生	2 4 4 M F 学生	2 3 4 M F 学生	1 4 3 M F 学生	1 2 2 M F 学生	1 2 1 M F 学生	2 1 3 M F 学生
目的		今後の日本社会の震災復興に不可欠な政策提言の足掛かりをつかむ	研究成果と残った課題について、国際比較をし震災復興のあり方を議論する	原子力規制委員会発足の成果、日本の原子力安全規制の社会的評価を明らかにし、震災復興のあり方を福島からの参加者と共に考える	日本の原子力安全規制の社会的評価を明らかにし、福島からの参加者と議論する	原子力安全規制のあり方、特にオフサイト対策（避難計画等）とバックエンド問題、さらに、復興に取り組む福島県の状況と課題について、福島からの参加者と共に議論する	今後の原子力政策のあり方、特にバックエンド問題に焦点を当て、復興に取り組む福島県の状況と今後の課題について、福島からの参加者と共に議論する	「フクシマの教訓」をふまえた今後のバックエンド問題に焦点を当て議論する。また、復興に取り組む福島県の状況と今後の課題について、浜通り地域からの参加者と共に議論する	原子力バックエンド問題などの現在世代における社会的合意形成が困難な課題を未来世代の観点も含め議論する。また、30年後・50年後の福島県浜通り地域の「かたち」から、今、福島復興に何が必要なのかを議論する	原子力バックエンド問題などの現在世代における社会的合意形成が困難な課題を未来世代の観点も含めて議論する。また、復興9年の歩みをアセスメントし、30年後・50年後の福島県浜通り地域の「かたち」から、今、福島復興に何が必要なのかを議論する	「デブリ取り出し」について技術的側面と社会的側面から考察する。また、福島からの参加者を交え「復興と廃炉の両立」の具体化と30年後・50年後・100年後の1F廃炉の将来像と地域再生について議論する
議論		事故からの一年を振り返り、技術的側面の原因・教訓、今後の人材育成についての提案、社会的安全規制に向けた信頼の醸成の必要性、災害に強い今後のエネルギー政策の考え方、リスク認識の日仏比較合同研究などの経過報告が行われた。	海外の研究者からマクロ視点における災害による日本の社会経済への影響、福島からの声、現地調査報告、日本及びアジアにおける原子力安全規制の制度について報告後、マクロとミクロの両視点から議論を行う。	議論の中心は日本の原子力安全規制：その体制、基準のあり方、そして、大学の役割について議論された。現地からの3年経た今が語られ、復興のプロセスにおける課題も指摘された。2020年に向け持続可能な地域社会を構築するには社会関係資本を高めることが求められ、世代内・世代間公平性の視点が示された。	日本の原子力規制について技術的・社会的両側面からフランスの事例、阪神・淡路の事例も含め報告・議論が行われた。「福島教訓」をテーマとしながらも、教訓とは何かということが未だはっきりせず、また、復興のプロセスが始まっている「将来像」が描けていないことが示された。	テーマを原子力安全規制からバックエンド問題という原子力政策のフレームとして、オフサイト対策の事故の教訓を生かした避難計画のあり方という具体的な検討、森林生態系の環境影響、福島からの現状と課題も報告が行われ活発な議論が展開された。	原子力政策のフレームにおける、事故の教訓、復興の現状が福島の被災自治体からの報告も含め議論された。現状の国民が置き去りにされ不安が払拭されない科学的根拠に基づく政策に対する問題提起、安全規制は変わったが、原子力政策に関し、国民の理解や住民参加などにおける変化がないことの指摘が相次ぎ、国民的議論・対話の場については今後継続していく議論である。	6年間の議論を踏まえ、改めて福島教訓を議論した。教訓は多様であるが整理しきれず活かされていない。本気度をあげ優先順位をつけ、全員が主体的に参加して賛同して合意を得る対話形式の方策の検討が指摘された。地層処分に関しても、安全性は大前提であり科学的客観性の確保は重要であるが、科学的手法だけでは限界があり、透明性の高い合意形成の場が原子力政策に必要なものである。	未来世代を含め、バックエンド問題と今後の福島復興の方性(1F 保存・遺産化の構想)を提案し議論した。核変換によるHLWの低減・資源化というHLW管理政策での新しい選択肢の提案、未来世代からの視点でHLW処分を社会的側面と技術的側面からの報告では、現在世代による積極的な選択肢の検討の必要性が指摘された。しかし、現状の日本では、現在世代による積極的な選択肢の検討の必要性が指摘された。市民と専門家の適切な緊張関係の必要性から大学のあり方の議論に発展した。人類史で大きな問題が起きると社会システムを変えるドライビング・フォースが生まれるが、9年経過してもそうした状況はあまり見られないというアセスができる。	客観的な根拠なしに願望で地域社会の将来を計画することは、原発事故を引き起こした社会構造と同じであり、教訓に学べない。「復興と廃炉の両立」を可能にする上で、最も重要な一つ「デブリ取り出し」である。技術的側面から現状と課題の報告をもとに議論し、技術的側面と社会側面を統合し社会的議論する必要性、そして、廃炉の将来像について議論した。技術的な課題もあがりますが、9年経過してもそうした状況はあまり見られないというアセスができる。	

経過報告

論点抽出

フレーム設定

論点絞り込み

具体的な議論

→議論の積み重ね

→継続すること

“これから”について：地域（フィールド）に入る

- 昨年、第10回のシンポジウムを終え：

「**10年経って、ようやくスタートライン**につけた」

その数か月後、昨年、2021年7月に早稲田大学から、

双葉郡に常駐研究員を派遣

- 常駐研究員に期待する役割：

地域において地域の人々と共に学ぶ、社会的な相互学習の牽引

➡ 吉原（2021）が指摘する「**地域専門家＝媒介知**」*

*地域専門家が担う媒介知＝つなぐ役割



地域（フィールド）に入ると

いろんな靴に出会う



靴は履けそうな気が...

put myself in someone's shoes

原発被災地という
感覚はもうない

(解除になっ
たが) 地元
に戻ってないので、
意見できない

(子どもの食
に関し) 時に、
母親の自分
と一個人の
自分とで葛
藤する

常磐モノ食べるよ。
美味しいからね

私は戻るが孫は
呼べないなあ

「廃炉」は
むこうの話
でしょ。

sympathy
同情, 思いやり

16世紀ごろからの一般語。辛い経験をした**他者に対する思いやり**や**哀悼の感情を表す語**として使われ、通常、幸福感情共有は含まれない。状況（文脈）依存的であり、他者と観察者の関係性に大きく依存する（長谷川2015）。

empathy
共感

20世紀初頭に芸術に心を揺り動かされるプロセスを感情移入の概念で説明し、心の中で他者と自分を融合する心理学概念として広義にとらえる。人間や動物だけでなく物体など非生物まで含む別の存在物の立場に自分自身を置いて、その**状況に存在しているときの感覚を想像できる能力**（長谷川2015）。

地域（フィールド）での立ち位置

sympathy
同情, 思いやり

empathy
共感

研究者や専門家が被災地に入ると...

他者との関係が緊密になると、自己の情念は揺るがされ過剰なsympathyに陥り一人よがりの同一化が問題を生み出す

共感の欠如により問題を生み、二次的な人的災害をもたらす

(菅 2013)

感情の同一化

客観性+共感的な理解

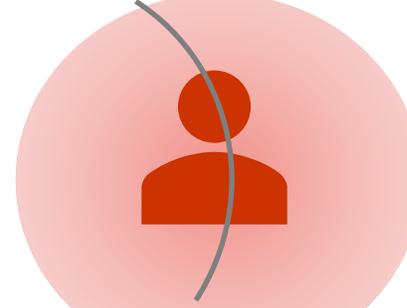
乾いた3人称の視点



一人称



二人称



2.5人称



三人称

専門的職業人は専門分野の知識や業務処理の枠組みにとらわれ対象としての人間をみる眼が狭く、柔軟性を欠いた「乾いた3人称の視点」になる。一方、家族と一体となって2人称の立場になれば、感情の同一化がおこり冷静な判断ができなくなる危険性 → 客観性を保ちながら2人称の立場を共感的に理解する、2人称の手前で止まっておく「2.5人称の視点」

(秦 2010, 柳田 2005)

地域（フィールド）の研究員

地域に入った動機：未知の世界への**好奇心**

- 東京から福島復興を考えていることの**違和感**
- **現地現認**
- 現地の暮らしを通して**自分**が**変容**するのか

違和感：研究員として現地入り

“市民→専門家”

長年民間企業で歩んだ延長にある

「個人」と「職業人」

研究 = (英語) research = (仏語) recherche

se chercher

search together

||

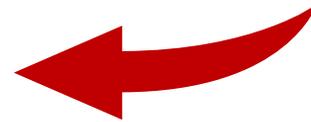
理解し合う

(動詞) **chercher**

search

||

探す



福島復興と大学：地域と一体となる学びへ

“理解し合う”には、まず、**地域を知ること**：

➤ 「**聴くこと**」＝“言葉を受けとめる”ことで解決の手がかりがつかめる

(鷺田 1999)

フィールドでの“**聴くこと**”の**実践**＝“**野の学問**”に近い

「ノ(野)の学問」と読むか「ヤ(野)の学問」と読むか：

- ・ノ ＝音がやさしく“民間の”というイメージとともに、現場に誘う**フィールド科学の方法**
- ・ヤ ＝“野党”・“下野”という対抗性を強調し、権力や権威への対抗性といった意味が込められる**在野性**
- ・身近な生活疑問からの諸問題を自らの手で解く、生活世界に埋め込まれた**生活知を把握**する方法

(岩本ほか編 2014, 菅 2013; 2021)

現地で実感する**目指す姿**は、地域の人々と共に学ぶ、**研究する者と地域が**一体**となつた社会的な相互学習**＝市民主体の「**新しい野の学問**」の実践

菅 (2013, 2021)

【主な参考文献】

Funtowicz, S.O., Ravetz, J.R. (1993) "Science for the Post-Normal Science," *Futures*, Vol. 25, Issue 7, pp.739-795.

長谷川寿一(2015)「共感性研究の意義と課題」『心理学評論』Vol. 58, No. 3, pp. 411-420.

秦温信 (2010)「進む医療とr2. 5人称の視点」『札幌社会保険総合病院医誌』第19巻第1号, pp. 1-2.

Irwin, A. (2006) "The Politics of Talk: Coming to Terms with the 'New' Scientific Governance," *Social Studies of Science*, 36(2), pp. 299-320.

岩本通弥・菅豊・中村淳編 (2012)『民族学の可能性を拓く「野の学問」とアカデミズム』青弓社.

松岡俊二 (2020)「ポスト・トランス・サイエンスの時代における専門家と市民 一境界知作業者, 記録と集合的記憶, 歴史の教訓」『環境情報科学』49-3, pp. 7-16.

中村征樹 (2008a)「科学技術と市民参加: 参加の実質化とその課題」『待兼山論叢』哲学篇42, pp. 1-15.

中村征樹 (2008b)「サイエンスカフェ: 現状と課題」『科学技術社会論研究』5, pp. 31-43.

Nowotny, H. (1977) "Scientific purity and nuclear danger: The Case of Risk-Assessment," eds. Mendelsohn, E., Weingart, P., Whitley, R., *The Social production of scientific knowledge*, USA, D. Reidel Publishing Company, pp. 243-264.

菅豊 (2013)『「新しい野の学問」の時代へ 知識生産と社会実践をつなぐために』岩波書店.

菅豊 (2021)「地方創生と「新しい野の学問」としての地域学」『学術の動向』2021.2 月号, pp. 26-30.

梅田聡編 (2014)『コミュニケーションの認知科学 2 共感』岩波書店.

早稲田大学レジリエンス研究所『原子力政策・福島復興シンポジウム開催報告』(第1回～第10回), <http://www.waseda.jp/prj-matsuoka311/access.html>

鷺田清一 (1999)『「聴く」ことのカー臨床哲学試論』TBSブリタニカ.

鷺田清一 (2006)『「待つ」ということ』角川選書.

柳田邦男 (2005)『言葉の力、生きる力』新潮文庫.

吉原直樹 (2021)『震災復興の地域社会学 大熊町の10年』白水社.

ありがとうございました

myamada@toki.waseda.jp